

粘土を用いた芸術療法的アプローチを行う際の留意点

了徳寺大学教養教育センター¹

東京都スクールカウンセラー²

関東学院六浦中学校・高等学校³

児童養護施設中心子どもの家⁴

橋本和幸¹, 田中理恵², 倉橋朋子³, 上野道子⁴

要旨

20世紀半ばにその名前が登場した芸術療法の技法は多様であるが、その中に粘土を用いた造形活動もある。粘土は立体的な表現が可能で、可塑性が高い、多くの人が幼児期に使ったことがあるなどの特徴を生かした利用をされている。本研究では、このような粘土造形を行った際の心理状態を数量的データにより調査することを目的とする。そのために、一般大学生40名を対象に粘土造形を試行させて、粘土に触った感想と制作した作品の題名を調査した。結果は、感想からは「手触り」や「素材の特徴」など10個のカテゴリ、作品の題名からは「動物」や「キャラクター」など7個のカテゴリが得られた。この結果から、粘土を扱うとその手触りから退行が促進され、癒しの効果が得られることが明らかになった。そして、粘土に触った感想は、思考、感覚、感情という3つのレベルから考えられることも分かった。また、柔らかさを中心に手触りについての感想が多かった。さらに、粘土の使用はコミュニケーションツールにもなると考えられ、グループワークへの活用も期待できる。

キーワード：芸術療法, 粘土, 大学生, 触った感想, 作品題目

The Benefits of Using Clay in Art Therapy

Kazuyuki Hashimoto¹, Rie Tanaka², Tomoko Kurahashi³, Michiko Ueno⁴

Center of Liberal Arts Education Ryotokuji University¹ School Psychologist, Tokyo² Kanto Gakuin Mitsuura Junior / Senior High School³ Child welfare institution "Chushin kodomo no ie"⁴

Abstract

Background: There are various techniques of art therapy that have been developed since the term was first applied in the mid 20th century. One possible technique is using clay to form shapes. In the case of clay, three-dimensional expression is possible, plasticity is high, and most people are familiar with it from playing with it in early childhood.

Objective & Method: This study aims to quantitatively investigate the psychological condition of subjects when they are working clay. 40 general university students were given clay to work with, and asked to provide their impressions about working the clay and the title of the work they created.

Results: The impressions provided by the subjects could be divided into ten categories such as "the feel" and "special features of the material", while the titles could be divided into seven, such as "animals" and "characters".

Discussion: It became clear that the working of clay brought about regression to the comfort of childhood and gave the subjects the effect of healing. It has also been recognized that the impressions of subjects after they have worked clay can be divided into the three levels of idea, sense, and emotion. Moreover, the most common impression was that

it was soft to the touch. In addition, the use of clay could become a communication tool, and therefore there is high potential for its use in promoting teamwork.

Keywords: Art therapy, Clay, University students, Touched impression, Title in work

I. はじめに

芸術作品を創作においては、完成された作品はもちろん、「つくる」という行為・過程そのものにも、創作者の心理が大いに映し出されると、古くから考えられている。

反映された心理状態を明確にしていくことで、心の仕組みが解明できるのではないかと考えられている。例えば、妙木¹⁾は、臨床心理学者がサイコヒストリーや病跡学で「天才」と称される芸術家の創造の秘密を解明しようとするのは、そこに心の病気とその治療についての秘密が潜んでいると思うからである、と述べている。

実際に、芸術家でセラピストになる者、セラピストをしながら芸術を探求する者もいるなど、芸術と臨床心理学の結びつきは強いものがあるのではないかと考えられる。

1. 芸術療法とは

芸術療法とは、心理療法の諸実践の中にあるいくつかの技法の一つである。しかし、単に芸術を心理療法に適応したものというだけではないとされている。

妙木¹⁾は、芸術が何らかの心の癒しに効果があるのは間違いないが、芸術家が芸術作品を創造する過程においては、何らかの生みの苦しみが生じることもあり、必ずしも癒しばかりが強調されるものとも言えないだろうと指摘している。

また、芸術療法では来談者（クライアント）が芸術という表現手段を用いて心の中にあるものを表出しているが、これは他の心理療法の技法、例えば言語による面接の際に発せられた言葉と何ら変わらないものである。したがって、クライアントが描いたり造ったりしたものは、いわゆる芸術作品とは異なり、その巧拙を問うことなく受け止めていく必要があると考える。

このようなことを考慮して、伊藤²⁾は、芸術療法は、芸術を用いた心理療法というよりは、自分の心の奥底にあるものを何らかの形で表現したいという、人間が生来持つ欲望を基礎にした心理療法であると論じているし、山中³⁾は、「芸術」療法と呼ぶよりも「表現」療法と呼ぶ方がよいと述べている。

2. 芸術療法の歴史

山中³⁾や伊藤²⁾は、芸術活動と心理学の関係、さらに芸術活動が心理療法に用いられるようになった歴史的背景を次のように説明している。

芸術が人間の心理に大きな影響を与えていることは、すでにプラトンやピタゴラスなど古代ギリシャ時代にも論じられてきていることである。しかし、芸術活動の心理学的な意味が学問的に論じられるようになったのは、20世紀近くになってからのことである。

心理学の分野で芸術創造や芸術体験が論じられたのは、精神障害との関連であった。具体的には、ロンブローソの『天才論』（1894）、プリンツホルンの『精神病者の絵画』（1922）、モルゲンターラーの『芸術家としての精神病患者』（1921）などの著作が挙げられ、いずれも精神障害を持つ人の作品に学問的分析を加えたものである。ただし、これらは表現から精神病理を探る病跡学や表現病理学の基礎になったが、芸

術活動を心理的援助に用いるところには至らなかった。

造形活動が心理療法に導入されることになったのは、分析心理学の創始者であるユングの功績であると考えられている。ユングはそれまで行動を共にしていた精神分析学の創始者であるフロイトと袂を分かった1913年から数年間、精神的に不安定な状況が続いた。その時に行った描画を含む造形活動によって精神的な癒しを経験した。そして、実際に臨床場面に描画を導入することで、描画の心理療法における効果を実感することとなった。

「芸術療法」という言葉は、1951年にイギリスのヒルが、結核など慢性疾患の患者への生活療法の一環として絵画を用いた実践で使われたのが最初である。これが現在のように心理療法の一つとして確立したものが、アメリカの精神分析学者ナウンバーグが絵画表現を通じてクライアントの無意識を解釈した力動的絵画療法と、ユングの教えを受けたスイスのカルフによる箱庭を用いた心理療法である。そして、イギリスの対象関係論者のウィニコットがなぐり描き法を用いて子どもへの心理療法を行っている。

わが国では、カルフに学んだ河合隼雄が箱庭療法として発展させ、1973年には徳田良仁を会長とする日本芸術療法学会が発足し、国際表現病理学会の日本支部となった。このように、表現病理学の研究も担いながら、中井久夫らによる優れた治療的試みが一貫して続けられ、わが国の実状に沿ったものとして発展してきている。

3. 芸術療法の特徴

芸術療法の特徴は、非言語的な性質にある。それは、言語表現では表しきれないような、心の奥底の心的現実をとらえることができる可能性である。クライアントによっては、意識下に様々な不安や葛藤を抑圧しているので、時には本人も気づかないような内容が思いがけずに表現されたり、言語表現よりもより意識から遠いクライアントの心の内面が示されたりすることも多いとされている。無意識にある記憶にアプローチするという点では、夢を心理療法に用いることにも似ていると言えるかもしれない⁴⁾。

さらに、言語的なコミュニケーションをとりにくいクライアントも、芸術療法を通じて、非言語的なコミュニケーションをセラピストと持つことができる。

芸術療法の技法は後述の通り数多く存在する。いずれを用いるにせよ、最も注意しなければならないことは、制作物の「芸術性」を求めすぎないことである。つまり、作品としての巧拙に目を向けると、制作物の「訴え性」⁴⁾、つまりメッセージ性が無視されてしまう恐れがある。

また、技法の修練を必要とするものほど、メッセージ性は低くなり、レクリエーション療法の一つに近づく⁴⁾とされている。それゆえ、芸術療法に用いる技法は、材料も含めて素朴なものである方が望ましいと言えるだろう。

4. 芸術療法の諸技法

芸術療法が適応される範囲は、絵画、音楽、造形、詩歌、心理劇、箱庭、陶芸、ダンス、手芸、読書、書道など幅広いものである。これは、わが国において専門家以外が趣味として行ったり、学校教育の中で芸術的活動を経験してきたりしているという背景があると指摘されている⁴⁾。例えば、芸術療法の代表格として挙げられる絵画療法については、小学校での図画工作科、中学校での美術科において少なくとも9年間は絵画教育を受ける機会があるため、心理療法の中で絵画を用いることを無理なく提案できる。このように義務教育の中で経験があるという点は、音楽、書道、ダンスなども同様である。また、趣味として

の俳諧、陶芸の実施人口も多く、決して特殊な趣味というわけではない。

このような背景は、クライアントにとってもセラピストにとっても、芸術活動を心理療法に取り入れる際に、物理的、心理的な障壁を持たずに済むという利点となる。特に、絵画や粘土などには正否がなく、了解可能性の限界もないものと考えられている⁵⁾。

また、心理療法の中で行われる芸術表現には、職業的芸術家のような修練された技能は必要とされない。中井⁴⁾が論じるように、画家の描いた緻密な絵画も、クライアントが描いた拙い描線も、セラピストの立場では同等に扱われるべきものである。むしろ、その技法の技能に優れた人がクライアントになった場合、かえってその熟練が心理的防衛として心理療法の妨げになる可能性もあるとされている。

そして、セラピスト自身もその技法について一通りのやり方は知っておいた方が無難であるが、必ずしも熟達した技能を持っている必要もないだろう。むしろ、クライアントの表現するものを評価なしで共感的に鑑賞し、それが意味することを理解しようと努める姿勢が大切ではないかと考える。これは、対面対話式の心理面接で発せられる言語表現に対する態度と何ら変わらないものではないかと考える。

5. 粘土を用いる技法

美術領域に含まれる芸術療法の技法に造形活動を用いるものがある。この中には、彫刻や陶芸などの複雑な造形活動も含まれ、実際に病院や施設などでの芸術活動やレクリエーションとして行われているようである。しかし、実施にそれなりの熟達した技能が必要で、自由な自己表現には向かないため、普及しているのは粘土を用いた簡便な造形活動である⁶⁾。

粘土は、幼稚園・保育園から小学校にかけて、多くの人が造形素材として使った経験があるものである。このため、多くのクライアントにとってなじみがあり扱いやすい素材であると考えられる。

粘土の特徴としては、その特有の感触を味わうこと、こねまわしたり、穴を開けたりするという触覚的な刺激を得られることがまず挙げられる。そして、他の造形活動と比べて可塑性が高く何回でもやり直しがきくこと、絵画と比べて立体的なイメージの表出が可能であることも挙げられる。これは、絵画療法などとは違った治療的可能性を持つものである²⁾。

このような触感や立体的なイメージの表出は、箱庭療法にも言えることである。しかし、粘土は箱庭の砂ほどは流動的ではなく形が維持しやすいことや、箱庭のように既存のフィギュアを組み合わせて自分のイメージを表現していくのではなく、何も形のない塊を一から形にしていくという点で、より自分の意志を反映させて保持できるという自発性を刺激する方法ではないかと考えられる。

さらに、水島⁶⁾や伊藤²⁾が指摘するように、粘土に穴を開けたり、叩きつけたりという行為にも心理的な意味があると考えられるが、ある種の破壊的な行為を行っても、粘土は使用や修復不能という事態にはならず、クライアントが安心してそのような行為にも取り組めるという利点も考えられる。

特に、その柔らかく可塑性が高いことから、触っているだけでも楽しい気持ちになり童心に返ったような気分になるのではないだろうか。これは適度な「退行」を生み、心理療法の適用場面で生かすことができるのではないかと考える。

その一方で、簡単に感情のままに動かしたり形が定まったりはしないという限界も考えられるが、これは自我が弱い人にとって安全弁になると考えられている⁶⁾。

なお、粘土を用いる場合、それを投げつける、ままごとの材料にする、製作物を並べるなどの方法で、事実上の遊戯療法や心理劇へと発展するケースも多いようである。しかも、これは子どもに限ったことで

はなく、大人にも見られるものである⁶⁾。

6. 粘土で遊ぶことの意味

粘土で遊ぶことの特徴としては、高野・古屋⁷⁾は「自由な構成と創造の喜びを子どもに与え、子どもの自信・自発性を高める」と論じている。

そして、亀口⁸⁾は粘土の役割を、遊戯療法では遊具として、芸術療法の中では表現手段として用いられていると述べている。

粘土が心理療法の実施場面に用いられる例をまとめた論文はそれほど多くはないようだが、筆者らはスクールカウンセリングや施設での援助の中で、実際に用いている。

また、粘土技法は、子どもだけを対象にするわけではない。大人がやることの意味も大いに考えられる。具体的には、横尾・亀口⁹⁾や亀口が「家族粘土法」として家族療法の場面に行った例を報告している。家族粘土法は、面接室の中で家族がともに粘土の触感を共有しつつ、造形活動を楽しむものである。この技法では、例えば不登校や家庭内暴力などを抱えた子ども本人だけではなく、その親や兄弟姉妹も一緒に粘土を用いることで、遊戯療法の原理を利用してそのストレスや心の傷を癒すことになる」と説明されている¹⁰⁾。

亀口は、実際に行った親たちの感想として、「何となく楽しい」とか、「若返ったような気分」などが挙がったことをまとめている。そして、粘土に家族で一緒に取り組むという体験が、家族の「接着剤」になったり、無用のものであった土の塊から何かしらの「形」が生まれたりする、という象徴的な体験を意味するなどの効果があるのではないかと分析している。

7. 粘土造形を面接の中で用いる場合

上記のように、芸術療法は言語によるコミュニケーションが難しい場合に選択されることが多い。しかし、言語による交流が中心である場合にも、それを側面から支えるために、あるいは言語的コミュニケーションと並行して非言語的コミュニケーションの活性化を図るために対面対話式の心理面接にも導入されるケースが考えられる。

それは、粘土造形はでき上がった作品が示すものにだけメッセージがあるわけではなく、制作の過程における様子が発するメッセージにも大きな意味があるからである。

例えば、粘土で作品を作っている最中に、どの部分を仕上げることにこだわっているのかによってわかることもあるだろう。あるいは、言語で表出できなかった感情が、その感情を象徴するようなものを作ることによって、完成した後は表出可能になるケースもある。中井⁵⁾は、自己の攻撃性を恐怖しつつ表現できない破瓜型統合失調症患者が、粘土で「サメ」を作ったことをきっかけに、より現実吟味力の高い怒りや不満を出せるようになった事例を紹介している。

また、考えがまとまらないクライアントが、粘土をこね回しながら面接をしていると、不思議とまとまった話ができるようになるという事例も、中井⁵⁾や次席筆者の中学生への面接の中に存在している。

さらに、自分の感情やエピソードを問われると十分に語るができなかったクライアントが、自分の描いた絵や作った粘土造形について聞かれれば能弁に話すことができ、結果として自分の感情や体験を話すことと同じ効果が得られたという事例もある。これは、制作物が象徴的意味やメタファーとしての効果を果たしたと考えられる。

そして、面接中に用いる粘土はセラピストからクライアントに手渡されるわけであるが、この一握みの粘土を手渡すという行為は、セラピストとクライアントとの接触や援助の中で何か意味のあるものを文字通り「手渡す」ことを象徴するものになると考える。

上記のように、粘土一片がクライアントとセラピストとの間に介在することにより、交流のチャンネルを増やす効果が期待できる。

ここまで述べてきたように、芸術療法的アプローチを行うことで、クライアントの内面およびクライアントとセラピストとの関係性に様々な効果があることが、多くの臨床実践の報告からなされてきている。

しかし、一般的にどのようなことが起きているかということ、ある程度の人数を集めて数量的に研究することは、これまでさほど行われてきていないように思われる。

そこで、本研究では、ある程度の人数を集めての数量的な調査研究を実施することを目指した。

本研究では、「天使のねんど」（中部電磁器工業製）という超軽量紙粘土を用いた。この粘土の特徴としては、従来の紙粘土に比べて、色が白く、軽く柔らかいことが挙げられる。このため、手に持ってみただけでも、何かいつもと違う感じや興味関心を持つなどの報告を亀口らが行っている¹¹⁾。

また、心理療法への応用例として、次席筆者は、スクールカウンセラーとして中学生への面接に用いている。例えば、多弁であるが落ち着きはなく目線が合わない生徒に、天使のねんどを渡すといろいろな作り始め、その製作物からその生徒の内面が推し量られた事例、緊張が強く言葉が出てこない生徒に粘土を渡して一緒に遊んだことで、天使のねんどに目をやりながらぼつぼつと話し始めた事例、来談するもテンションが高く落ち着かない生徒たちが、しばらく天使のねんどを触っているうちに次第に口数が少なくなり、相談したいことを話し出した事例が挙げられる。

さらに、四席筆者は、児童養護施設での遊戯療法の中で天使のねんどを用いている。その利点は、同じく芸術療法の一つである絵画に比べて可塑性が高く、絵に苦手意識がある子どもにも導入しやすいこと、手に付きにくいので汚れを気にする子どもも抵抗を感じにくいこと、普通の粘土より柔らかいので小さい子どもでも扱いやすいことを挙げている。使用例としては、作品を作ることに加えて、丸めたりこねたりする作業自体を楽しんだり、ボールに見立てて遊具として使ったり、絵の具で色をつけたり、ビーズを飾るなど他の道具と組み合わせて使うなど多様な使い方を挙げている。

II. 目的

本研究では粘土造形に注目して、粘土を触った時に自分の内面に浮かんだもの、また自身がイメージしたものを制作物として個人作業で具現化する際に、どのような心理状態であったかということ、本人によるふりかえりをもとに分析することを目的とした。

なお、一般的な傾向を検討するために、今回は臨床的援助を行っていない大学生を対象に実施することとした。

III. 方法

1. 調査対象

大学生 40 名。

2. 調査時期

2010年1月～7月

3. 調査方法と内容

調査協力者を一室に集めた上で、調査協力者1人ずつに「天使のねんど」を1個渡した。そして、この粘土を用いて1時間程度使って自由に造形物を作るように教示をした。

制作終了後に、A4版の回答用紙1枚に、粘土を触った感想と作品の題目、テーマについての2点を書かせた。

なお、粘土の試行開始から調査用紙の回答終了までの時間は、調査協力者に任せた。

4. 分析方法

自由記述式の回答をカード化して、臨床心理士3名でKJ法¹²⁾によってカテゴリに分類した。

具体的には、各調査対象者の回答を、1つの内容につき1枚のカードに転記した。このカードを臨床場で芸術療法的アプローチを用いた経験がある臨床心理士3名で議論して、KJ法に基づいて分類・整理を行った。

5. 倫理的配慮

調査用紙は2つの質問項目以外には記入することなく、無記名のため個人が特定されないことがない様式とした。そして、本研究以外に用いることはないこと、調査用紙への回答を拒めること、分析は個人についてではなく、全体の傾向を見ることを口頭で説明し、同意した場合のみ調査に協力してもらった。

IV. 結果

1. 各質問の分析結果

1) 「粘土を触った感想」について

(1) 回答の分析

上記の質問に対する回答をカードに転記した結果、105枚のカードが作成された。これをKJ法に基づいて分類・整理を行った。

この結果、粘土を触った感想については、「手触り」(28個, 26.7%)、「素材の特徴」(24個, 22.9%)、「使い方」(18個, 17.1%)、「退行」(14個, 13.3%)、「作業への感想」(6個, 5.7%)、「粘土についての知識」(4個, 3.8%)、「作業の難しさ」(3個, 2.9%)、「幼い頃との比較」(同)、「心が読める」(同)、「におい」(2個, 1.8%)という10個のカテゴリに分類できた。

(2) 各カテゴリの特徴

a. 「手触り」について

このカテゴリに含まれる記述は全体の26.7%と全体の四分の一強を占め、最も割合が高かった。回答例としては、「軽いし、柔らかくて肌触りがいい。ずっと触っていたい感触だった」、「すごく柔らかくて気持ちよかった」、「とても軽くてマシュマロみたいでとても面白かった」などが挙げられる。つまり、粘土を触ってみての第一印象について述べたものである。

b. 「素材の特徴」について

このカテゴリに含まれる記述は全体の22.9%で、2番目に回答数が多かった。記述内容を見ると、「力の弱い人にも簡単に扱えていいと思う」、「軽いので作るのが楽」、「もう少し固めの方が作りやすい」など、造形活動を行う際に使う素材として特徴的な部分についての印象に重きがおかれた回答であると考えられる。

c. 「使い方」について

このカテゴリに含まれる記述は、全体の17.1%であった。このカテゴリの記述内容は、「コミュニケーションツールとしてよい」、「遊びで使うにはよい」などであり、実際に使ってみてその先の使い方について発想が広がった様子が感想で述べられていたように考えられる。

d. 「退行」について

このカテゴリに含まれる記述は全体の13.3%であった。記述内容を見ると、「とてもなつかしく、むかしに戻ったような気持ちがあった」、「小さい頃の気分に戻った感じ」などであり、小さい頃に戻ったような気分になっていると解釈できるものであった。

e. 「作業への感想」について

このカテゴリに含まれる記述は全体の5.7%と上位4つに比べると多くはないが、記述内容を見ると、「やっているうちに静かになる」や「こんな粘土があるなんて知らなかった」など、粘土を取り扱う作業の様子についての感想にあたるものであると考えられる。

f. 「粘土についての知識」について

このカテゴリに含まれる記述は全体の3.8%と少なかった。記述内容を見ると、パッケージに記載されている材質を見て、一般的な紙粘土に用いられている材質との違いについて述べているものであった。

g. 「作業の難しさ」について

このカテゴリに含まれる記述は全体の2.9%と少なかった。記述内容を見ると、「なかなか自分のイメージのような作品を作るのは難しい」など、作品をうまく仕上げるのが難しいことについて述べられたものであった。

h. 「幼い頃との比較」について

このカテゴリに含まれる記述は全体の2.9%と少なかった。記述内容を見ると、「子どもの頃のようにアイデアが出てこなくなった」など、自身が幼い頃に経験した粘土での作業を思い出して、その頃との比較をした感想が述べられていた。

i. 「心が読める」について

このカテゴリに含まれる記述は全体の2.9%と少なかった。記述内容を見ると、「その場そのときで作り手の感じようを見ることができないのではないだろうか」など、心理療法におけるアセスメントに通ずる感想が述べられていた。

j. 「におい」について

このカテゴリに含まれる回答は2つだけであったが、触った感想を尋ねているにも関わらず「におい」という別の感覚が出てきていることは注目に値すると考える。

2) 「作品の題目・テーマ」について

(1) 回答の分析

上記の質問に対する回答をカードに転記した結果、68枚のカードが作成された。これは、一人で複数個の作品を作った調査協力者がいたためである。これをKJ法に基づいて分類・整理を行った。

この結果、「動物」(26個, 38.2%), 「キャラクター」(11個, 16.2%), 「人工物」(8個, 11.8%), 「食べ物」(7個, 10.3%), 「自然物」(7個, 10.3%), 「オリジナルキャラクター」(5個, 7.4%), 「抽象概念」(4個, 5.9%)という7個のカテゴリに分類することができた。

(2) 各カテゴリの特徴

a. 「動物」について

このカテゴリに含まれる回答は全体の40%近くを占め、最も多かった。記述内容を見ると、「うさぎ」, 「馬」, 「ペンギン」など、実在する動物を作ったという回答であった。

b. 「キャラクター」について

このカテゴリに含まれる回答は全体の16.4%と2番目に多かった。記述内容を見ると、「アンパンマン」, 「ドラえもん」, 「チーバくん(国体千葉大会のキャラクター)」など、実在のアニメやイベントのキャラクターを作ったという回答であった。

c. 「人工物」について

このカテゴリに含まれる回答は全体の11.8%と三番目に多かった。記述内容を見ると、「雪だるま」, 「お茶碗」など、人間が人工的に作り出した造形物や道具に分類されるものであった。

d. 「食べ物」について

このカテゴリに含まれる回答は全体の10.3%であった。記述内容を見ると、「ソフトクリーム」, 「メロンパン」などであり、本物の形状に近づくように苦心して作りこんだという回答が添えられていた。

e. 「自然物」について

このカテゴリに含まれる回答は、「食べ物」と同じく全体の10.3%であった。記述内容を見ると、「花」, 「桃」, 「星」など自然に存在する物体を模したものに該当すると判断した。

f. 「オリジナルキャラクター」について

このカテゴリに含まれる回答は全体の1割未満であり、さほど多いものではなかった。記述内容を見ると、「ちょうちんあんこうとおたまじゃくしが合体したもの」, 「ぎょうぎのような花」など、自身で考案した創作物であった。

g. 「抽象概念」について

このカテゴリに含まれる回答は4個で、最も少なかった。記述内容を見ると、「こねていたら面白い模様がついた」, 「しぼむ」など具体物ではなく、抽象的な物体や状況を表したものを作ったという回答であった。

V. 考察

1. 粘土を触った感想から見えてくること

本研究から、10カテゴリのうち最も回答数が多かったものは、「手触り」であることが明らかになった。質問項目が粘土に触った感想を尋ねているものなので、このような回答が多くなるのは当然のことと考えられるが、そのことを差し引いても、やはり粘土を用いた技法は、まず触覚に刺激を与える技法¹³⁾と分類されている通りの結果であると言えるだろう。「におい」と合わせて、感覚レベルでの感想ととらえる

ことができると考える。

次に多かった、「素材の特徴」と「使い方」は作業の材料としての粘土の特徴について述べられたものである。これらに加えて、「作業への感想」、「粘土についての知識」、「作業の難しさ」、「心が読める」は、知識や評価などの思考レベルの感想ととらえることができると考えられる。ただし、この場合の思考は、粘土に触れるという体験を通してたどり着いたものが多いことに注目すべきである。

最後に、「退行」と「幼い頃との比較」は、粘土に触れているうちに小さい頃の感覚がよみがえってきているものであった。粘土は幼児期から児童期にかけて造形素材として学習や遊びの中でよく用いられてきているものであり¹³⁾、水島⁶⁾は、粘土は用いているうちに遊戯療法に発展し、このことは大人にも見られると述べていることなどから考えると、他の芸術療法と比べても巧拙が問われにくく、退行を促進しやすい素材であると言えるのではないだろうか。なお、これらは感情レベルでの感想と分類できるものと考ええる。

なお、粘土に触った感想は、安原¹³⁾などが述べる粘土を用いた実践についての説明と合致したものであった。そして、粘土には紙粘土、油粘土、土粘土など様々な分類があることも考慮して、今回用いた「天使のねんど」を含めてその特性をよく理解し、適応する対象や場面に応じて適切に選ぶことが援助の効果を生むのではないかと考えられる。

2. 作品の題目・テーマから考えられること

安原¹³⁾によれば、自由制作による粘土作品は、表現の中からクライアントの様々な心の在処を読み取ることが可能であり、絵画と同じく作品の象徴的解釈につながるものと考えられる。Rubin¹⁴⁾では、りんごの木 (p37-38)、人の顔 (p42-45)、あるストーリーを象徴するシンボリックな作品 (p70-72)、家 (p214) など様々な形態でその時のクライアントの内的世界が表現される様子が報告されている。

本研究において調査協力者それぞれが作ったものを尋ねると、「動物」と分類できるものが最も多かった。粘土を用いた造形技法で動物を作る例は多い。これは粘土の持つ可塑性や流動性から、生き物が絶えず動いてその形態を変えようという様子が連想されることや、動きのあるものを作ることが製作者の体内に流れるもの、つまり消化機能や循環機能に働きかけるという解釈¹³⁾がなされている。また、製作者が自分自身や、家族や友人など身近な人間についての思いを制作物に投影する際に、人間そのものを作っては自分の内面が生々しく表出してしまうため、動物という生物を作り擬人的に扱うことでワンクッションを置いているという考え方もできるだろう。もし、動物を複数作れば、箱庭療法や人形劇のように、その配置の様子から関係性を投影されたものになるのではないかとと思われる。

その次に多い「キャラクター」は、動きがあるもの、擬人化できるという点では動物と同じ扱いができるものと考えられる。これに加えて、マンガやアニメのキャラクターならば、動物に比べて幼い印象があり、粘土を扱ったことで退行を引き起こした結果制作されたと考えられることもできるだろう。

「自然物」、「人工物」、「食べ物」、「抽象概念」といった静物は、その形態や用途からクライアントの内的世界が表現されていると考えられる。例えば、人工物の中のお茶碗は何かを入れるものを象徴し、自分に外部のものを受け入れる余地があることや、自分を受け入れてほしいということを表しているのではないかとされている¹³⁾。「抽象概念」は自身の心情をやや哲学的に表現した、より思考レベルでの表現、「食べ物」はその食感や食欲というより原始的な生理的欲求を連想させる表現で、「キャラクター」のように退行に結びつく表現とも考えられる。

最後に、「オリジナルキャラクター」は、「キャラクター」と同様に自身の内面を投影している可能性もあるが、面白いものや変わったものを表現したいという側面も見え、他のカテゴリに属する制作物と比べると、内面の表出というメッセージ性ととも、作品としての質という「芸術性」も含まれるものとも考えられる。

3. まとめ

粘土を触った感想をまとめたものから、思考、感覚、感情という3つのレベルでの感想がある可能性が示唆された。また、粘土の手触りについての感想が多く、その中でも粘土の柔らかさに関するものが多かった。さらに、今回用いた「天使のねんど」の特徴である、軽さ、柔らかさ、伸びやすさに言及しているものも多かった。これらは、今まで使ったことのある粘土との違いに驚いたり、興味を持ったり、「癒される」というような肯定的な感想から、「柔らかすぎて造形に向かない」というその特徴に否定的な見解を示すものまであった。

感想での癒しに関連する回答とともに、作品の題目・テーマからも、「キャラクター」や「食べ物」などの子ども返りを連想させるような、退行促進的な働きが起きていることが考えられる。退行は、日常生活でのやるべきことやそれに伴うプレッシャーから生じる緊張感を解きほぐす作用として起きるものであり、感想の中でも語られている粘土を扱うことによる癒しやリラクセスに通ずるものがあると考えられる。しかも、粘土を扱うことを止めれば日常生活に引きずることのない程度の退行であり、安全性の高いセラピーであると考えられる。

4. 今後の課題

今回は、40名という少ない人数での調査となった。そこで、より一般的な傾向を得るためには、調査協力者の人数をさらに増やす必要があると考える。

また、一口に大学生といっても、粘土を取り扱う体験を小学校以前にしたきりの者と、造形活動を行うなど何らかの形で現在も粘土を使用する機会がある者とは、自ずと着眼点が異なってくるため、様々な背景を持つ調査協力者を募る必要があるものと考えられる。

さらに、感想の中で、コミュニケーションツールとして使えるとか、皆で一つのものを作りたいなどと挙げられていたように、1対1の面接だけではなく、グループワークでも利用できそうである。すでに亀口や国峯ら¹⁵⁾が親子間のコミュニケーション促進の効果があることを報告しているが、大学の初年次教育や小中学校での学級活動など仲間作りの場にも活用できるのではないかと考えられる。そこで、今後は共同作業を行った際の心の動きを調査する研究が行われることも望ましいと考える。

文献

- 1) 妙木浩之：芸術－セラピストと芸術の切っても切れない関係，心の臨床の広場，2（2）：31，2010
- 2) 伊藤俊樹：芸術療法，氏原寛ら共編，心理臨床大事典，培風館，東京，379-384，1992
- 3) 山中康裕：芸術・表現療法，上里一郎ら編，心理療法②，金子書房，東京，111-134，1990
- 4) 中井久夫：芸術療法，土居健郎ら編，治療学，みすず書房，東京，229-256，1989
- 5) 中井久夫：治療，岩崎学術出版，東京，1985
- 6) 水島恵一：イメージ・芸術療法，大日本図書，東京，1986

- 7) 高野清純・古屋建治：遊戯療法，日本文化科学社，東京，1996
- 8) 亀口憲治：家族力の根拠，ナカニシヤ出版，京都，2004
- 9) 横尾摂子・亀口憲治：家族システムの治療的变化に及ぼす粘土造形法の効果，福岡教育大学紀要，44（第4分冊），285-293，1995
- 10) 亀口憲治：家族療法，ミネルヴァ書房，京都，2006
- 11) 亀口憲治・生田倫子：家族心理学研究者の第一人者にインタビュー，家族心理.com，<http://www.kazoku-shinri.com/interview/kamegintabyu.html>，2011年1月28日閲覧
- 12) 川喜多二郎：発想法，中公新書，東京，1967
- 13) 安原青児：福祉のための芸術療法の考え方，大学教育出版，岡山，2006
- 14) Judith Aron Rubin：Approaches to Art Therapy: Theory and Technique, Brunner/Mazel, Inc, U.K., 1987（徳田良仁監訳：芸術療法の理論と技法，誠信書房，東京，2001）
- 15) 国峯智・武藤榮一：不登校を予防する教師と保護者のシステム作り－子育て支援プログラムの活用を通して－，群馬県総合教育センター教育研修員研究報告書，2004